

2002年09月25日

日本心理学会第66回大会 ワークショップ「スピーチにおける感性情報-3-」

演題(3)：「二者の発話量の均衡状態と印象の関係 - 社会心理学的アプローチ - 」

所属：名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻

氏名：小川一美

【背景および目的】

「日常的相互作用過程において、会話が有効かつ重要な役割を担っていることは疑いのないところである。にもかかわらず、社会心理学で会話そのものが研究対象とされることは少なかった」(浦ほか, 1986)という指摘がなされた。しかし、その後も、本邦においては、二者間の会話場面における、実際の会話行動そのものを対象とし、対人関係の諸相を検討した研究が十分に行われてきたとは言えない。

そこで、本ワークショップでは、対人コミュニケーションを社会心理学的に検討することの意義や実際の研究例などを紹介し、今後の課題や発展可能性について考えていきたい。

【内容】

1. 対人コミュニケーションを社会心理学的に検討する意義

- ・対人関係の諸相を検討する研究テーマのひとつ
- ・状況的要因、对人的要因を考慮する必要性

2. 従来の社会心理学的研究の問題点

- ・場面想定などのように実際の会話行動を扱っていない



例：発話スタイルに関する研究(小川・吉田, 1998; 1999 など)

3. 2人の会話者による相互作用に着目する必要性

- ・会話は二者によってダイナミックに作りあげられる相互作用である



例：発話量の均衡状態の効果に関する研究(小川, 2000 など)

【課題】

1. 単独音声に関する研究成果や基礎的データとの関連
2. 研究目的に則した実験状況の設定

【連絡先】

E-mail : kazu-@xb3.so-net.ne.jp